

心理学史の 複線径路

[第7回]

ヌーシャテル。ピアジェが育った街へ行ってきました。 サトウタツヤ

立命館大学文学部教授・研究部長。今回、研究交流と調査のために、初めてスイスの地を踏みました。ピアジェと言えば、腕時計。このピアジェも心理学者のジャン・ピアジェ（1896-1980）もヌーシャテルがふるさとです。



ピアジェのふるさとヌーシャテルは人口およそ3万4000人の小さな街で、フランスとスイスの国境・ジュラ山脈の麓に位置しています。彼はその幼少期、ヌーシャテル湖でモノアラガイなどを採集して近所の博物館に熱心に通っていたそうです。当時の博物館長はゴデという分類学者で、軟体動物の収集と分類を教わっていました。

10歳の時に近くの公園で身体の一部が白い雀を発見。そのことを書いた文章を博物学愛好家の雑誌に送ってみたところ、それが掲載されるという栄誉を得ることになりました。この雑誌が学術雑誌であるかどうかはともかく、また、分量もわずか1頁（100語程度）であるということもともかくとして、自分の発見が大人に認められたということはこの幼い少年に影響を与えたものと思われまます。ピアジェは地元のヌーシャテル大学理学部に進学し、1918年には同大学で軟体動物（スネーク）の研究により動物学の博士号を取得しました。

さて2014年12月1日、ヌーシャテルでピアジェの生誕地を訪れました。記念の銘板がありました。



写真1 ピアジェ生誕地の銘板

ただし、この銘板、ある家の壁面に埋め込まれているもので、知らなければ見過ごしてしまうと思

われます。



写真2 銘板の設置されている建物

この銘板を設置しようと発案したのが、ヌーシャテル大学のアン・ネリー＝ペル・クレモン（Anne-Nelly Perret-Clermont）教授です。彼女は、『ピアジェとヌーシャテル』という本の編者の一人ですが、わざわざ私が滞在するホテル（ALPESETLAC）を訪ねてくれました。



写真3 アン・ネリー先生と

某研究員から「本にサインもらってきて！」と頼まれたので、この本を差し出したところ、この本の目次にそって、ピアジェの生涯を解説してくれることになりました。ラッキーです（本が良い媒介となりました）。彼女はジュネーブ大学でピアジェに学生として接したとのことですが、その印象は「エゴセントリック！」だそうです。

そして、アン・ネリー教授がヌーシャテルに赴任してみると、ピアジェのことを知るにはヌーシャテルの知的環境のことを知らなければならないと感じて、「社

会文化的アプローチに則って」ピアジェの生涯を本にまとめたのだそうです。この本の副題がThe Learner and the Scholarであるのは、学者としてのピアジェを知るには、学習者としてのピアジェを知る必要がある、という理由からだそうです。

いくつかの話の中から印象深い話を振り返ると、ピアジェの母がアリソンという時計製造の家の出であること、また、彼女が神経症的であったという記述が多くなされているが、むしろ田舎には似つかわしくない聡明さを持ち合わせていたので、そのように蔑まれたのではないか、ということです。

また、ヌーシャテルは、フランスからプロテスタントが逃げてくるような場所だったためか、印刷業が盛んで知的雰囲気富んでいたということも話してくれました。そういう事情があるため、小さなヌーシャテルに大学ができたこと、その大学は決して大きくないため色々な分野の研究者が交流していたこと、それがピアジェに良いように影響したのではないか、ということもおっしゃっていました。

話は尽きなかったのですが、紙数は尽きました。より詳しくはアン・ネリー教授のご著書をお読み下さい。

参考文献

Anne-Nelly Perret-Clermont, Jean-Marc Barrelet (2007) *Jean Piaget and Neuchâtel: The Learner and the Scholar*. Psychology Press.